

黒い雨

映画文学人生論

原作：井伏鱒二（1965）「新潮」

監督：今村昌平（1989）

出演：高丸矢須子 田中好子

閑間重松

閑間シゲ子

庄吉

脚本：今村昌平 石堂淑朗

撮影：川又昂ほか

音楽：武満徹

好太郎 三木のり平

今。もし、向うの山に虹が出たら奇蹟が
起る

広島に原爆が投下されたのは昭和二十年八月六日。今から六十六年も昔のことだ。

井伏鱒二の小説『黒い雨』が発表されたのは原爆投下から二十年後の昭和四十年。私は何度か読みかけたが、その都度、筋が追えなくなり、読できなかった。井伏鱒二の文体はとっつきやすそうにみえて、甘くみていると突き放される。

今村昌平監督の映画公開はそれから二十四年後の平成元年、私とその映画を観て、やっと原作を読了したのはさらに二十三年後、東日本大震災に見舞われた後である。たかが一篇の小説を読了するのにずいぶん長い時間が流れるものだ。

原作に比べて、映画は方言が効果的に使用されている。これは私が広島県の隣の岡山県出身で、方言になじみがあるから、よけいに「効果的」と感じるのかもしれない。

「この映画は声高であってはならない。低声でなければ」と今村監督はいう。主人公の閑間（しずま）重松（北村和夫）や庄吉（小沢昭一）たちのまのびした広島弁のやりとりを聞いていると、思い出がよみがえり、なつかしい。

「広島はのうなつてしもうたんですかのう」

「のうなつてしもうたのう。戦争はいけんのう」

「そうかのう」

「そうかもしれんのう」



黒い雨

映画文学人生論

「そーいやあそーうかのう」

ぼそぼそとしたつぶやきが私の心の古い層にひびいてくる。私も心の中ではこんなつぶやきを繰り返しながら生きてきた気がする。

井伏鱒二の原作にはこのようなセリフはない。方言ではなく、標準日本語で重松がはっきり口に出して声高に言う場面がある。

「戦争はいやだ。勝敗はどちらでもいい。早く済みさえすればいい。いわゆる正義の戦争よりも不正義の平和の方がいい」。

これが映画では、「人間いうのは正義の戦争よりも不正義の平和のほうがましいうことがまんだわからんのかのう」となる。

重松の悩みは同居している姪の矢須子（田中好子）だ。早く嫁がせなければならぬ。矢須子は原爆が投下された時、爆心地にはいなかったが、船で瀬戸内海を渡る途中、黒い雨をあびた。

五年後、矢須子の縁談がいくつか持ち上がったが、その都度、二次被爆の疑いから破談になっている。そして、ついに矢須子の髪の毛が抜けはじめた。重松は山に向かって祈る。今村監督もさすがにこれは方言にはしなかった。

「今、もし向うの山に虹が出たら奇蹟が起る。白い虹でなくて、五彩の虹が出たら矢須子の病気が直るんだ」。

原発はこらえてつかあさい広島忌